

序

浅見克彦

島の文化の探究をつうじて、その魅力と可能性を複数の角度からあぶりだすこと。これが本書の土台となった共同研究の最初のもくろみだった。主に、島を民俗学や宗教思想の観点から研究してきた者と、社会思想や社会学の分野で島の喚起力に関心をもつ者をメンバーとして、紆余曲折の「他流試合」が二年間にわたり続けられた。その過程はけっして平坦なものではなかったが、なかなかの苦勞をへて生み出された一応の成果を前に、思うところがある。

吉本隆明は、『定本柳田國男論』（洋泉社）の冒頭で、柳田の多くの作品が、秘めたる「空隙」によって人を引きつける点に注意を喚起している。その「空隙」とは、たとえばある村里の婚姻風習の推移をその村の胎内に入りこむように描きだす筆致の先に、「すでにあらかじめ把握された」「外部からの世界把握」（たとえば婚姻の一般史のごとき理解）が予想されるときに口を開ける。ただし柳田の著述に、後者を一般的理論的仮説とし、前者を具体的例証としてしめすという構図があるわけではない。そうではなく、基本的には後者の「外視鏡」の視線が著述の上では禁じられていながら、前者の「内視鏡」が見せる像の先に「外部からの世界把握」が暗に「喚起」されるとき、あの「空隙」が私たちを吸いよせるのである。吉本はこの「空隙」を「亀裂」とも呼んでいる。つまり、「じしんの内視鏡の視線と、表面では禁じたじぶんの外部からの世界把握」とのあいだには、実はしばしば懸隔と飛躍があるというのだ。しかし、吉本はそこに、非難すべき欠落ではなく、「何かを訴えているような衝動」を感じとった。もちろん、これはひとまず、柳田という一個の研究者に関する批評である。だが私は、こうした「空隙」と「亀裂」の喚起力が、島というテキストにもあると思う。

島の文化は、それ自身、ある種の「すでにあらかじめ把握された」世界理解を立ちあげる。それが自己像として提示する神話や精神世界、そして他界観念や呪術的な世界観である。しかもそれは、しばしば驚嘆に値する刺激的なものである。人は否応なくそれらの世界理解に引きこまれながら島の文化に分け入ろうとする。ところが、島の細やかな襲をかき分け、いわばその内に包まれるように、その生活と民俗の一つ一つをとらえてゆくと、なにがしか埋められない「空隙」があることに気づかされる。つかんだと思ったその瞬間に、どこかでかわされてゆくあの感覚。しかしそのとき、島の日常や儀礼の事実「内在」することでこの「空隙」を解消しようとするなら、今度は、島自体が見せる「外視鏡」の像がぼやけながら遠のいてゆく。そして、この埋められざる「空隙」が、あの汲み尽くせない海の厚みと同じように、なぜか私たちの思いをとらえ、さらに強く吸いよせてゆくことになるのである。

.....